

日蓮宗教義

28  
38

020018-000-8

特16-752

日蓮宗教義大意

新居 日薩/述

M32.4

ABH-0184



宗祖日蓮大士畧傳

佛陀滅後二千百七十一年(西曆紀元一千三)に當り大日本帝國に一大教傑降  
生して佛敎の改革を謀り一宗を新創せるものあり即我祖日蓮大士是  
なり大士安房國長狹郡小湊の産本姓藤原氏父は貫名次郎重忠と云ふ  
年甫めて十二にして出家し十六歳にして薙髮す爾來東請南詢天下に  
周遊し徧く法龍義虎の間に往來して道を索むれども佛滅既に久しく  
傳法漸く其眞を失ひ諸祖の宗義に於て疑ひなき能はず是の時に當て  
天台眞言禪淨土律等の自力門他力門の諸宗敎流布し其自力門は高尚  
に失し他力門は卑近に流れ共に皆佛陀立敎の本意に戻るのみならず  
將に以て國家人民を誤らんとす大士謂へらく如かじ直に之を經典に  
已心に求むるの勝さるゝにはと便ち衆を謝して入藏し獨り一切經を



二  
緇くこと數々なり遂に佛陀出世の因縁は全く法華經に存するを發  
悟し而して此法華の妙理のみ善く國家をして安寧ならしむるの正法  
なるを斷定し是れに據りて以て佛敎の改革を謀らんとして新に一  
宗を建立せられたり大士時に年三十二なり大士常に國家的の觀念を  
以て此正法を弘宣す故に其著書守護國家論立正安國論等あり就中立  
正安國論の如きは國家の危急(漢古來)を見て時の執權北條時頼に建言し  
て國家の盛衰は教法の正邪に由ることを述べ上下舉て信仰の方針を  
誤れるを極論し以て邪法を捨て、正法に歸し一國の安寧を祈求すべ  
きことを主張して忌憚する所なし此書熱血を濺ひて墨とし鐵骨を拔  
て筆どしたるものにして縷々萬言立論高邁謂ゆる光焰萬丈天を貫く  
の概あり夫れ大士諸宗流布の後に起り舉世信仰の宗教を折伏するを  
以て謫戮交々至り獅坐暖かなるに暇あらず然れども大悲國家を念

ふの切なる一身以て正法の犠牲に供し鼎鑊甘きこと飴の如くにして  
毫も屈撓せざるなり抑も當時北條氏の勢力は夫の佛國メロビンジャ  
ン王家末造に於ける宮内大臣ナヤール(説)及ひ其子ベビン(王經)の如し  
蓋し北條氏をして君臣の大義を棄却し非望を窺窺するの心あらしめ  
ば短王の武舞を我國に演出せんも亦未だ測るべからず其勢力の強大  
なること此の如し大士進では此の如き勢力強大の北條氏に抗し退て  
は天下多數の諸宗に膺り死生艱難の間に大獅子吼して法華の正法を  
弘宣し以て佛陀の本懷を暢べ以て國家の安寧を企圖し以て末代の衆  
生安心立命の捷徑を開かれたり大士壽六十一にして寂す今を距ること  
と六百十二年前なり弟子四十餘人あり亦善く大士と艱難を共にせり  
遺文數十卷あり皆世に行はる現今寺院五千僧侶七千信徒二百餘萬あ  
り而して其大山巨刹と稱するものは率ね皆大士の靈跡に係る世の論

四  
者大士を以て東洋の路傍と稱す是れ猶ほ未だ皮相の見たるを免かれ  
ず若夫れ大士の道徳の高大なる學問の深淵なる氣宇の豪壯なること  
を窺はんと欲せば試に其遺著を繙ひて之を拜覽せよ大士嘗て曰く日  
蓮が慈悲廣大ならば南無妙法蓮華經は萬年の外未來までも流布すべ  
し又曰く印度の佛法は東漸し日本の佛法は西漸すと遠鑑炬の如く正  
に驗あり

### 聖愚問答鈔曰

所謂諸佛の誠諦得道の最要は只た是れ妙法蓮華經の五字也檀王の贊  
位を退き龍女が蛇身を改めしも只た五字の致す所なり今の經は受持  
の多少は一偈一句と宜べ修行の時尅をば一念隨喜と定めたり凡そ八  
万法藏の廣きも一部八卷の多きも只た是れ五字を説んがため也靈山  
の雲の上へ鷲峰の霞みの中に釋尊要を結び地誦付囑を得ることあ  
りしゆ法體は何に事ぞ只た此の要法にあり誠に遷滅無常は昨日の夢  
め菩提の覺悟は今日のうつゝなるべし只た南無妙法蓮華經とたにも  
唱へ奉らば滅せぬ罪やあるべき來らぬ福やあるべき眞實なり甚深な  
り是れを信受すべし

日蓮宗教義大意

故大僧正 新居日薩上人 講述

器傾けは水溢る國家穩かならざれば身安からず故に法華本門の大教は國土常住を明して衆生本有の果報を示し先づ現世を安じて更に來世を扶けしむ是れを以つて祖師日蓮の言を建るや立正安國を以て一宗弘化の實績とす夫れ國は法に依て昌へ法は人に依て貴し然らば則ち國家の盛衰は教法の邪正に由る須らく正法を弘めて國家の清寧を祈求すべきなり所謂る正法とは何をや法華本門壽量の妙法蓮華經是なり衆生本有の妙理を明せる法門なるを本門と云ひ壽とは功德なり量とは詮量なり此の妙理に無量の功德を備へたることを詮量する經なる故に本門壽量の妙法蓮華經と云なり所謂る衆生本有の妙理とは

佛智所見の實相にして即ち一切衆生自爾天然の相貌なるもの唯一法  
 界虚融無差にして全く十方三世の十界の依正色心を以て一人の身相  
 とし心性とし身體とし永く衆生差別の妄見を亡滅せるものなり抑此  
 の妙理は豎は三世横は十方世界に亘り上は日月星辰より下は山河大  
 地草木瓦礫等に至り其中間に生命ある人類より禽獸蟲魚の末に至る  
 まて凡を森羅萬象一も残さず皆我が一身の法界なり一念の三千なり  
 と通達解了して我が一身と法界の萬象と同一不二にして都て物我の  
 間に於て一點の隔異なく物我絶待の我徳となる是之を法界の大我と  
 云ふ之を法華に明して我實成佛已來甚大久遠と説けり  
 夫れ釋尊年三十の時初て此の大我を覺悟し直に衆生に示さんと欲し  
 試に華嚴經を説て其一端を示すと雖衆生の狹量なる之を體達する能  
 はす止むを得ず四十餘年間各修各成差別の方便を説て衆生の機縁を

調熟し年七十二にして始て本懷を暢るを得て先づ法華開演第一に  
 唯佛與佛乃能究盡諸法實相と説けり其諸法實相とは十界の諸法眞實  
 の相貌と云ふてにて三界の依正十界の諸法皆是れ本有無作の三身如  
 來常住不滅一體不二の相を云ふ也衆生は諸法に於て異相を見諸佛は  
 諸法に於て同相を見る迷悟の見に因て諸法に同異の相をなすと雖諸  
 法は固より同不同の異なし而して衆生所見の異相は衆生の妄見にし  
 て法の本理に非ず但佛の所見の諸法の同相即ち是れ法の本理亦是れ  
 眞實なるをを示して諸法實相と説き玉へり仍は衆生の了ざるを慮り  
 て更に此の諸法實相の義を釋尊自ら我が一身に結攝し示して曰く今  
 此三界皆是我有其中衆生悉是吾子と山河大地千草萬木皆我が一身な  
 るが故に三界は皆是我有なりと云ひ又十界の衆生は皆我が影像にし  
 て都て我身の分身散體ならざる者なき理を示して其中衆生悉是吾子

と説り斯くの如き妙理は今日始めて覺悟上より見る所なるが故に今  
此三界と云ふ今の一字は昨迷今悟の分界を示せるなるへし故に經に  
如來如實知見三界之相と云へり斯の如く知見上より論せは始覺の妙  
理なれども其妙理の實體は固より本有常住本覺三身の如來なるを  
明して成佛已來甚大久遠と云ふ也  
されば丈六四八の釋尊を認めて之を佛陀なりと云ふは衆生妄見の佛  
陀にして佛陀の眞相に非ず所謂眞相とは十界三千の依正色心森羅  
萬象みな我一身なり一念の三千なりと通達覺悟せる毘盧遮那徧一切  
處の本覺三身の如來是れなり釋尊已に是の如し一切衆生も亦復是の  
如し釋尊より論せは三界の依正皆釋尊の一體なり衆生より論せは衆  
生所有の三界なり衆生所有の悉是吾子なるべし佛と衆生と一體不二  
の妙躰なり是を華嚴經に心佛及生衆是三無差別と説けり

已に上來説所の如く衆生即佛身なれば衆生所住の國土も亦即ち諸佛  
所住の實報の妙土なり故經に我常在此娑婆世界と云ひ常在靈鷲山と  
云へるは是れ娑婆即寂光を明せるなり一の娑婆世界なれども衆生よ  
り之を見れば三界無安猶如火宅と説き佛より之を論すれば我此土安  
穩天人常充滿と云へりされば均しく三界なれども迷悟の所見に依て  
淨穢苦樂を異にするのみ所居の三界に於て二あるに非るなり知見一  
び開れば觸處みな妙境ならざるはなし故に釋尊出世の一大事とする  
は欲令衆生開佛知見使得清淨故出現於世と云て衆生をして知見を開  
悟せしむるに在るのみ衆生若し能く知見一ひ開けば三界の實相即常  
住の妙土を見るを得んされば娑婆妙土の實報を示して衆生成佛の  
結果を顯し安心立命の基を立て一生成佛の本懷を達せしむるを法華  
の妙宗とす故に宗祖本尊抄に示して曰く今本時の娑婆世界は三災を

離れ四劫を出たる常住の淨土なり佛已に過去にも滅せず未來にも生  
 せず所化以て同體なり是れ即ち已心の三千具足三種の世間なりと  
 故に宗祖日蓮開宗の初に當て先づ立正安國論を制し之を政府に建言  
 して法華の正法に歸依し以て國家の靜謐を祈求すへきの急要なるを  
 を論述し法華弘通の確標を定立す夫れ一身の安寧は必ず一家の無事  
 に依り一家の安寧は亦必ず一國の安寧に因る國にして安寧ならされ  
 は一家一身の安寧尙ほ得へからず況や一國の安寧をや抑も三界は佛  
 國なり娑婆は寂光なり惜ひかな但衆生の迷るか故に本來寂光の淨土  
 に居なから淨土を見ず貪瞋痴慢の煩惱を起し生老病死の苦界に陥り  
 大火所焼時の三界に輪廻せること是れ自ら求たるの穢土苦惱の果報  
 にして娑婆國土の本有に非るなり此世界の實體は釋尊法華に正しく  
 示して我此土安穩と説き玉へば固より安樂清淨の國土にして憂悲苦

惱あることなく生を迎ひ死を送り人間一生の能事を全ふして毫髮も  
 憾みなく現世安穩後生善處の佛説の如くあるへかりしを只衆生の思  
 ひ習はせる迷にて憶想妄見の網の中に入り自ら此の惱みを致せるこ  
 とを哀れなり人若し佛の知見を開きなば世界は自ら安穩清淨の國土と  
 顯れて佛の境界に入り常寂光の淨土となる故に速に佛の知見を開て  
 自受法樂の妙果を得んと願ふべし苟も佛知見を開んと欲せば法華本  
 門の正法に歸依すべきなり誠に能く權邪の偏教を捨て、法華眞實の  
 正法に歸依せば天長へに地久く人物和ひ和樂し五風十雨鼓腹擊壤の  
 國光を觀るを得て三界眞に佛國なる實境を感見し四海皆な兄弟の安  
 寧を全ふし天下第一人として其所を得ざるなく自他俱に安く同く常寂  
 光土に安住するの結果あらん  
 宗祖一代の化導は此の法華本門の正法を建立し末法の衆生をして成



佛の直道を得せしむるに在り然るに聖を去ること既に遠く權實大に  
 雜亂して舉世皆な信仰を錯る大悲切に倒惑を憫み此の正法を唱導す  
 と雖容易く信受せざるのみならず怨敵紛然として競ひ起り將に正法  
 流布の前路を遮らんとするの勢は恰も佛の金言に符合せり經に云く  
 如來現在猶多怨嫉況滅度後と是に於てか先づ死身弘法の大願を立て  
 曰く善に付け惡に付け法華經を捨るは地獄の業なるへし大願を立て  
 日本國の位を譲らん法華經を捨てし觀經等に就て後生を期せよ父母  
 の頸を刎ん念佛申さずばなんどの種々の大難出來すとも智者に我が  
 義破られずば用るじとなり其外の大難風の前の塵なるべし我れ日本  
 の柱とならん我れ日本の眼目とならん我れ日本の大船とならん等と  
 誓ひし願破る可らずと斯く大願を立て玉ひて建立する所の本門法  
 華の正法なり其正法に三あり曰く本門の本尊曰く本門の題目曰く本

門の戒壇是を本門壽量の三大秘法と云ふ此の三大秘法は釋尊出世の  
 本懷宗祖當身の大事たる法門なれば其義意甚た玄妙にして亦た靈活  
 なり請ふ試に其一端を摘要して之を示さん

初に本尊とは本門の教主は釋尊即ち十界の大曼荼羅是なり其中央に  
 圖出する南無妙法蓮華經の七字之を總體とし其左右に細列せる諸尊  
 即ち十界なるものを別體とす曰く釋迦牟尼佛多寶佛上行無邊行等  
 舍利弗目連梵釋四王阿闍世王阿修羅王龍王鬼子母  
 十女提婆達多等の十界是なり夫れ十方三世の諸法廣しと雖も十  
 界常住の相に過ぎず故に直に十界を以て法界の萬法を攝して一の大  
 曼荼羅とす此の大曼荼羅は久遠本佛の實體を圖示せるものにして形  
 相莊嚴の佛陀を指すに非るなり如來最初道場に於て覺悟し玉へる所  
 の本體は十方三世に周徧貫徹して十界の色像三千の森羅無盡に緣起

し圓融無礙の妙體にして一切衆生の四大六塵みな如來の法身に非る  
なく一切衆生の五陰三業みな如來の報身に非るなく一切衆生の四  
六根みな如來の應身に非ることなし一鉢の妙法にして種々の異相を  
顯し事々物々互に融し互に即して三千の諸法未だ曾て纖毫の隔異な  
きを本覺無作の三身如來と云ふされば夫の提婆の瞋恚も龍女の愚痴  
も餓鬼の貪欲も乃至十界各々の本分を其儘併せて一の久遠本佛の全  
體なりと示したる本尊なり譬へは川流江河の諸水も大海に流入すれ  
は同一の鹹味となりて復差別なきが如く十界の諸法も亦是の如し如  
來の眞如海に會入し佛の知見を以て之を見れば一切皆を遮那の妙境  
本覺の妙智ならさるはなきなり  
斯く本尊は釋尊の身上に就て示したるも其本意は凡夫一身の本體も  
亦是の如く三千常住十界圓具の佛身なることを觀照せしむるの妙境

なり宗祖云く所詮妙法蓮華經の常體とは何物をや只た法華經を信す  
る父母所生の肉身是なりと苟も此の妙鏡の本尊に向て我身を觀照せ  
ば行者の一色心は全く是れ久遠本有の妙體にして法界の萬法三千の  
森羅は全く自身の分身散體なれば中央の題目は但是れ行者自己の一  
色心を表彰せる本體にして四圍に羅列せる諸佛衆僧四衆八部は并に  
自身の分身なり其外十方三世の十界の依正森羅の諸法は自己一色心  
の全象なることを開示せる本尊なりと知るべし  
既に十界同一の體なるか故に其體より起縁する善惡の心も亦隨て十  
界に周ねく平等に感應す故に一念も佛心を起せば十界共に佛心とな  
り一念も地獄の心を起せば十界共に地獄となるなり一念の微といへ  
ども感應の廣く且つ速かなること例へば一掬の水も之を口に含めば  
全身を潤し兩掌纒に火爐に向へば暖忽ち雙踵に及ぶが如し是他あし

其體一あるか故に其用も普く感應するあり一念の微それ慎まざる可  
 んや夫れ公私の二心は善惡の分岐する所あり故に佛の教を設くるや  
 勉めて人をして物我の情執を去て少欲知足普賢の行を修し自他共に  
 安寧に歸せしむるに在り今ま本宗の行者よく本尊に向て吾身の本體  
 即ち十界圓具自他同體の身あることを了知し自他彼此の間に於て苟  
 も物我の隔異を亡泯し愛憎取捨の情勢を脱離せば喜怒哀樂等の七情  
 皆其規を越ることなく觸向對面亦皆公公正無私の平等心からさること  
 なく此身己に一分佛の境界に入れり來世も亦何ぞ佛身からさらん  
 や故に宗祖曰く今ま法華は八教に超へたるの圓おれは速疾頓成にし  
 て心と佛と衆生と此の三は我が一念の心中に攝して心の外にあしと  
 觀すれば下根の行者尙ほ一生の中に妙覺の位に入る況や中根の者を  
 や何に況や上根をや總して一代聖教は一人の法おれば我身の本體を

能々悟るべし之を悟るを佛と云ひ之に迷ふは衆生ありと

夫れ悉達太子は人身より直に進で釋迦牟尼佛とあり一天四海を利益  
 せり宗祖善日磨も亦凡夫より發心頓悟して大菩薩の法位に登り餘光  
 猶ほ萬年の末に赫赫たり舉一例諸と云て龍女の成佛は一切の女人成  
 佛を顯はし達多の成佛は一切の惡人成佛を知らしむるが如く宗祖の  
 成佛は末法の一切衆生の成佛得脱の先例を爲せるあり釋迦宗祖を以  
 て自ら期するは自ら信するの至りにして宗教信者の本意あるべし況  
 や人は萬物の靈長あり而して但一己一身の私利に齷齪し自他共樂の  
 道を講究せずんば何くに其靈長たるの分在らんや況や吾身の本體は  
 本覺無作の三身如來なるを知らず自ら卑劣の凡夫なりと思ひ自暴自  
 棄して大道心を發す能はざるもの之を經に窮子と云へり窮子もと窮  
 子に非ず大富長者の一子あり然るを自ら失脚迷誤して自ら窮子と謂

へるなり例へば莊周の夢に胡蝶とあるが如し胡蝶豈に莊周の本身な  
らんや今ま行者も亦此の如し自ら迷て凡夫なりと思ふが故に五欲七  
情に羈されて愛憎捨の心を恣にし只一身の私利のみを貪り憂悲苦  
惱に沈む未來は六道輪廻の悪果を感ずるの迷報を致せるこそ哀れな  
り是等の迷夢を警覺し苦累を救んが爲に先ず本尊を圖して凡夫の本  
體即ち佛身なることを示し大道心を感じせしむべき大地盤を定めた  
り故に行者此の本尊を觀照し自暴自棄せる卑劣の心を除却せば凡身  
に即して妙覺果滿の佛身を得ること猶ほ胡蝶の夢寤めて本の莊周に  
復するが如く鷄子の身とりも直さず長者の子となるが如く舍利弗の  
身を改めずして華光如來となるが如きなり故に本尊は衆生成佛の基  
本を示せるの妙境なりと知るべし上記本尊を  
次に題目を明さは既に吾身全く佛身なることを信得せる念々宜しく

佛心即大道心を發し自己本分の大利を求て自他共樂の眞果を成すべ  
し然るに衆生の散心なる斂念思惟して之を憶持するを難し故に口業  
唱題を以て心業受持に代るなり唱題受持は法華立行の妙觀にして之  
を本門の題目と云ふなり此の題目即ち南無妙法蓮華經は釋尊久修の  
妙法にして法華一經の精要なり誠に能く至心に住して心念口唱せば  
功德冥に薰被し利益虚しからず日用常作の際に於て善事にまれ惡事  
にまれ苦も樂も皆是れ妙法不思議の本理蓮華因果の感應なりと信じ  
なほ縦ひ樂境に遇ふも之に惑溺耽湎するの誤りを爲さず不幸にして  
苦境に陷るも苟も免んとするが如き卑劣心かく苦をは苦と思ひ樂を  
は樂と思ひ一心清淨に南無妙法蓮華經と唱へ苦樂の二境に惑亂せら  
れず自ら心の師となり心を師とするをなく五欲七情を折伏し自身即  
四徳の佛身なりと深く信じて凡劣卑陋の心を除去すべし若し曠患の

心盛ならは閑に之を思ふべし本尊既に提婆を列ねたり抑提婆の墮獄するや瞋恚を不理の境に恣にするが故に遂に惡果を感せり亦瞋恚の心を以て猛省勇斷よく三惑の惡障を一掃して速に瞋恚法界の本理に達しぬれば地獄の當體を改めずして天王如來の善報を來せり均く瞋恚にして地獄佛果の霄壤を爲せり昔日の提婆は能く瞋恚を御して遂に成佛せり我も亦何ぞ能せざらんやと深く之を猛省せば瞋恚に於て自ら身心共に豊なるを得て夫の物我の際に於て公平無私の本理を見て自他共樂の境に至らんと難からざるべし豈に但瞋なく痴なく空槁木死灰の如くにして方に始て佛陀と謂ふべけんや今ま愚夫愚婦の目に一丁字なきものなりとも至信に住して唱題受持せば亦能く此の佛境界に至るを得ん之を本門の題目修行の妙觀と爲すなり  
三に戒壇を明さは嗚呼身は是れ本覺無作の佛身なり法は是れ久遠本

覺の妙觀なり妙境妙智函蓋相應し唱題修行せば念々清淨にして五欲愛染の妄情自ら消滅し自然に本門の妙戒を感得し行住坐臥語默作々に皆是不思議解脱を得て生老病死憂悲苦惱あるとなく常樂我淨の妙土を感見するを得ん所謂受持の行者所住の土即常寂光土なるものなり故に經に當知是處即是道場と云へり文の意は法華修行の處は何の場所なりとも一切皆是れ道場にして佛の住處なりと示せるなり之を本門の戒壇に住せる受持受得の妙果報とするなり立正安國論に曰く汝早く信仰の寸心を改めて速に實乘の一善に歸せよ然れば則ち三界は皆是れ佛國なり佛國何ぞ衰んや十方悉く寶土なり寶土何ぞ壞んや國に衰微なく土に破壞なくんは身は是れ安全心は是れ禪定ならんと抑立正安國は一宗建立の大本なり然れば則本門法華の宗旨は本門三秘の正法を建立して衆生成佛の基本を固ふし國土常住の眞理を明に

二十四  
して國家を安穩ならしむ所謂先づ現世を安んじて更に來世を扶けんと云ふは是なり之を我日蓮宗の大意とす

明治三十二年四月五日發行

定價 五錢

編輯者 大塚存妙

發行者 森江佐七

東京市麻布區飯倉五丁目四十六番地

發兌元

日蓮宗大中小壇林御用書肆

東京市麻布區飯倉五丁目四十四番地

森江書店

して國家を安穩ならしむ所謂先づ現世を安んじて更に來世を扶けんと云ふは是なり之を我日蓮宗の大意とす

明治三十二年四月十五日發行



編輯者 大塚存妙

發行兼刷者 森江佐七

東京市麻布區飯倉五丁目四十六番地

發兌元

日蓮宗大中小壇林御用書肆

東京市麻布區飯倉五丁目四十四番地

森江書店

